

淨佛國土と淨土宗

——法然上人を中心として——

千賀眞 順

淨土教に於ける淨仏國土思想は如何に理解すべきかに關し、本学々報に指導教を中心として推論したが、更に淨土宗、特に法然上人を中心としていさゝか管見を試みたい。

日本に於ける學問、思想はその受容が生活に即して理解され、具體的現實的實踐的に展開していることけ言をまたない。日本仏教が論理哲學の面より透過して現實的實踐的な性格を持っているのは指摘するまでもない。具體的現實的な自からの時代と國土の上に立つて先づ人生を理想的に建設せんとの成就衆生に即して淨仏國土の努力が燃えている。且つ強烈なる祖國意識を通じて人類の平和に貢獻せんとの急願に燃えていると言える。こゝに日本仏教の特色が躍動している。故に日本仏教を一讀して祖師は何れも一切衆生を度し、淨仏國土を眼目とせることも自明で眞に淨仏國土の本義を發揮して言える。聖徳太子の仏教加受容が此の精神に立つか、明かに衆生を利益し仏國を淨めんとする菩提心初発に立つたものは仏教大師である。額文を待つまでもなく、菩提心の熱烈なるものが見える。此の傾向は豈に天台のみならず、平安末期

より鎌倉にかけて出現せる高僧祖師何れも菩提心を強調されてゐる。思ふに祖師高僧の教説を成就するものは時代であり、時代の衆生である。教史は祖師に代表されるが、その基底をなすものは、それ／＼の時代に於ける大衆でなくてはならない。衆生を成就するとは衆生の要求を満足せしめることである。これこそ真宗の淨仏國土の意義でなくてはならない。

法然上人の思想教説亦此の範疇に立つてこの淨仏國土の實が躍動してゐると言える。宗祖は送本彌念仏の專修を以て世を救い人を救い、以て所謂成就衆生し仏國土を淨める菩提心を秘めての教説である。而して出導教を中心とする淨土教は、菩提心は仏教に隨順し仏意に隨順して、眞の仏弟子になるところにゐると教えられた。この立場即ち淨土門的立場にあつては衆生成就によつて、國土の淨まつて行く教法としてその特色をもつものと言える。

二、

先づ宗祖の伝尸の上で注目されることは異説があるが、九歳の時父の非業の死に際し、この遺言が注目される。諸伝尋しく録しているが、十六門記によると、「時國大爭の疵を蒙りて今を最後の時、九歳の子に向つて遺言すらく、我死去の后世の風儀に隨つて敵へて敵を恨むことなかれ、これ偏へに先世の報なり、若し此の讐を報んと欲はば、生々世々互に害心を懷て在々所々に輪廻絶ゆることなからん。生ずるものは皆々死を悲しむ。愁憂更に限りなし、我此疵を痛む、人何ぞ痛まざらん。我此命を惜む。人豈惜まざらんや。我が情を以て人の慰を知るべし

。然らば則ち一向に専ら自他平等の清度を祈り、怨親悉く消えて親疎同じく菩提に至らんことを願ふべし。』とあるが、まことに釈尊の説教を彷彿と聞くがやうである。この深い宗教的な還言の法然上人に如何なる感化を与へたか、十八歳黒谷隠達にも求道の理由こゝにある所由を述べ、後の述懐にも、「われ幼年の昔より父の遺言忘れがにくして」とある如く恩讐を超えて自他平等の清度の爲めに学道された。眞実の道心者こそその道念の行に於て真理を解し衆生を救ふのである。宗祖は此の道を求めて皇阿より虚空へと師事され、更に法相宗の教後、三論宗の寛雅、華嚴宗の慶賀等の門を叩き研学多年し我が心に相応する法やある、我が身に堪ゆる行やあると求めく、遂に源信の指示により、導師の釈教により、菩提を証得する道、阿史の叔はるゝ道として専修念仏により、阿入教土宗義を確立されている。一代八十年の教化は導師の指諭により仏教に隨順し、仏意に隨順する眞の仏弟子の修道を以て衆生を成就されんと念願せられた。

⁽⁴⁾法然上人の教説は勿論末法思想の上に立つことは明かである。宗祖の誕生されし時代、並に生涯の時代相は如何なるものであつたか、先輩の論作にも詳にされている如く、日本史の衰史とも言ふべき源平の血腥い政争の渦中にあつて諸大寺は内争軋轢し、大伽藍は相次いで焼失し、無數の僧尼は殺傷され、「玉葉」に「仏法王法の滅盡の期至れるか、五劫の世天魔その力を得、これ世の運運なり、惣じて言語の及ぶ所に非ず、筆端のつくすべきに非ず、夢か夢に非ざるか、云つて余りあり、軟いて益なし、左右する能はず。』と嘆ぜしめた末法油惡の世相であつた。その上震災火災等続出して民衆に塗炭の苦惱を与え絶望に呻吟せしめた。既成教団は無方何等の施す術なく、唯祈祷と高尚な成仏論を掲げてゐるのみで、時代、人心と全く遊離して

いたから、当然教会は転換が有されなくてはならぬ状態であつた。この悲痛なる時代苦を救ふものは、時代苦に徹する所に在る。教法は時を考へ、機を考へなくてはならぬ。法然上人の教法はこゝに基調する。故に南宗の言葉として、「われ淨土宗を立つる心は凡夫の報土に生まるゝことを示さんが為なり、へ乃至」もし別の宗を立せずば凡夫の報土に生ずる義もかくれ、本願の不思議もあらはれかたきなり。とあり、「諸宗の所談異なりと雖も、すべて凡夫報土に生まるゝことを許さざる」當時の教会に新宗を宣明され、「大唐の台導和尚の在しへにしたがい、本朝の恵心の先徳のすゝめにまかせて」の伝承である。偏依台導は道理の前に於ける信順遷仰である。即ち導師の機の宗教的自覚、人同性を見究めての願意に直参された体験より導師に論據を発見されたのである。和語燈(8)一に「淨土の一門に入らんとあもわん人は道緯、台導の釈を以て所依の三部經を習ふべきなり。とあるが、導師の義釈によつてのみ三經を身證され得た故であらう。故に觀經疏の如き「西方の指南行者の目足なり」とまで尊崇され、淨土宗別立の意義を見出されたものと言へる。この結果聖淨二門の批判は安樂集に依られて、聖道門は出離生死の教道、淨土門は往生の信行として、勅伝(9)才二十一卷に、「もし智慧をもて生死をはなるべくば、淨土門は捨て、この淨土門に赴くべきや、聖道門の修行は智慧をきわめて生死をはなれ、淨土門の修行は愚痴にかへりて極樂にむかる。とありて淨土祖師を一貫する機の宗教的自覚が十分窺はれ、「淨土宗略鈔」には、導師の機法二種の信を伝承して、「はじめにわが身のほごを信じて、のちには仏のちかいを信するなり、のちの信のためにはじめの信をばあぐるなり。とあり、機の宗教的自覚に基く絶対仏の同体他仏法の信を強調されている。このことは大原問答を述懐として、「大原にして聖道淨土の論義ありしに、法門

は牛角の論なりしかども、枝根くらべには虚空勝ちにりき、聖道はふかしといへども時すぎぬれば、いまの枝にかなはず。淨土門はあききに似たれども当根に叶ひやすし。として凡夫の修道として本願名を選取されてゐる。淨土行者に相應する修道が唯名の一行であると言ふ理由については、選取集に難易勝劣の二理を擧げて念仏は諸行万行の總和であり、且つ何人も平等に容易に何時でもなしうるからであると言われている。即ち念仏は易きが故に一切に通ず、諸行は難きが故に諸行に通ず、然らば則ち一切衆生をして平等に往生せしめんが爲に、難を捨て易を取りてもつて本願としたまふか、とあるが、真に万人洩るゝことなき仏の慈悲に催され、この本願念仏を身證し教説されてゐると言ふべきである。故に聖道門の修行によつて仏國を淨める菩薩道では凡夫は洩れるから、凡夫の淨土門によつて總てを生かさんとされたものである。一人の洩れるものなく、衆生を成就せんとしている。したゞ前者を逆前とせる當時として特に後者を新に高調する關係上、前者を集めてゐるまでの口吻のあるのは止むを得ないといわねばならない。それを七八百年を経て今日まで堅持する要はない。と言われたのは味ふべきと申すべきである。宗祖の捨聖歸淨の意義は此の觀望で見ると、鐘西上人も徹底採集上卷に、「沙門某甲、昔聖道を学ぶ時、聊か彼の淨仏國土成就衆生の義を習ひ伝ふ。今淨土門に入るの後、又此の迷採本願念仏往生の義を相承す。二祖の相伝を以て聖教の諸文を見るに、畢竟聖道門の人、畢竟土門の人と之れを知るべからず。聖道淨土兼學の人之れを知るべし。此の意を得てより一切の大衆教を扱き、一切の大衆論を見るに隨喜の疾禁じ難し、これ聖教の源底なり。法門の奧義なり。仏菩薩の秘術なり。」とあつて、法然上人の教學を以て聖教の源底、法門の奧義なりと隨喜されたのは、法然教の奥

相を徹見されたものである。宗祖が捨聖帰淨として宛も対立するかの如く見ゆる聖淨二門が大衆仏教の二面であることは二種の勝法として肯定されている。前者は諸法の本性より仏に向ひ、後者は現實の面より仏に向ふもので眞實に徹するに於ては同一である。勝法でありつゝ、尚ほ聖道を捨てるとの口吻は、飽くまで万人の理るゝことなき仏の慈悲を身證された結果、本願念仏を提唱されんとした所由である。聖道門は淨土門の延長線の歸結でなくてはならない。故に選取⁽¹²⁾衆に、「夫れ速に生死を離れんと欲はゞ、二種の勝法の中に、且らく聖道門を闕きて選んで淨土門に入れ、淨土門に入らんと欲はゞ正雜二行の中に、猶助業を傍にして選んで正定業を専らにすべし。正定の業といふはすなはちこれ仏名を称するなり。名を称すれば必ず生ずることを得、仏の本願によるが故に。」とある。所謂三重選取は選取衆の歸結とも見られる。又一重は既成仏教を批判して淨土門の卓越性を顯示されたもので、当に教界に大衝擊を与へている。又二重は正雜分別で雜行を却つて正行に改すべき理由として、選取衆には五番の得失へ親疎対、近遠対、有向無向対、回向不回向対、純雜對を擧げて論斷されている。即ち宗祖當時は聖道の修行として流行したもの、持戒、菩提心、解才一義、誦誦大衆の四種雜行で、「この四箇の行、当世の人殊に敬するところの行なり、これらの行を以て殆んど念仏を抑甲。」とある程であつたが、これらの定散二法を一擲されてゐる。又三重は專修念仏の確立で如何なる人も最後の一人に至るまで平等に慈悲に浴せしめんとこの徹底した法門の開闢である。この本願念仏は、宗祖の教に基く宗教的自覺の体験であるが、この思想背景には大衆仏教、特に天台等の眞理が地盤となつて是かに存することは注目される。仏心宗といふ新興の宗教にまで、堂々たる見識を持たれた程であるから、大衆仏教に於ける幽玄なる思想、淨仏國土思想の宗教的展開に

外ならぬ。たゞ淨土宗発生の時代、淨土宗を受入れた教養、社会的選抜が必要となつたまでである。特に吾人は先輩の論明にあるとは思ふが、武士の子として仇敵報復の執念の苦惱を秘めつゝ學道し淨仏國土の聖道で解決出来ず、淨土教隨順の修道にして初めてこの討仇の可執心が起えられた爰が注目に価すると思う。

三

法然上人が淨土祖師に一貫する至純なる淨土信仰を、堅持されたことは推察されるが、これかと云うて淨土そのものの論義はあまりされていない。顧みられなかつたかのやうである。しかも伝説よりも生涯よりも首肯される法悦、現實人生に於て自己の感得する沐浴慈光の強調された爰が特記されている。このことはシナ日本淨土教の祖師に未だ明瞭に見られない宗教的事実である。法語に、「近代の行人觀法をなすことなかれ、仏像を觀ずとも蓮慶康慶が造りたる仏程だにも觀じあらわすべからず。極樂の莊嚴を觀ずとも、櫻梅桃李の花程も觀じあらわさん事かにかるべし。たゞ彼の仏今現在世成仏当知本誓重願不虛衆生信念心得往生の教を信じて、ふかく本願をたのみ一向に名号を唱ふべし。」

とあつて、導師が円丈さながら梵名念仏する所に切々と救済の現實感受を體驗されたと全く同一である。本願の大生命の真相に立つて、心通の奥底より感受されている。眞實な教法の體驗である。この心理態に淨仏國土成就衆生念願が、如実に味得され、行者に觀喜と希望を与え、

仏國土を淨め行く確固たる宗教体系として見らるゝのである。淨土行者の反省して純化に努めなくてはならぬ處である。而も念仏が長時修の現實生活の上に行はれなくてはならない。苦惱を体験さればする程、時代悪を反省すればする程、愈々弥陀本願の感受される人生觀の上に立つ教法たることが知られる。敢に、「生けられ念仏の功つもり、死むは淨土へまいりなん。とてもかくてもこの身には、思いわづらう事やなきと思ひぬれは生死ともにわづらひなし。」とあるが、日本大乗仏教の歸結である。林名念仏の一声／＼に絶対価値を味い、今現に念仏してゐる所に弥陀仏の救いがあり、その心理態に淨土國土の念願の自と成就されるものと言わねばならない。

註

- (1) 仏教大學々報第三十号
- (2) 法然上人全集、六四三頁、
- (3) 法然上人全集、八一頁、
- (4) 矢吹慶喜氏、「三階教の研究」
- (5) 矢吹、前田、石井諸氏の法然伝に詳論されている。
- (6) 玉葉、享元元年四月十四日條、
- (7) 法然上人全集、八二四頁、
- (8) 植王本和語燈タ一、
- (9) 法然上人全集、八九〇頁
- (10) 法然上人全集、九一頁

(11) (12) (13) (14) (15) (16) (17)

法然上人全集、八三四頁、
法然上人全集、一四頁、
山本幹夫氏、「法然仏教」
淨金、六七卷、八八頁、立道「徹選採集試言」
法然上人全集、五二頁、
法然上人全集、五三一頁、
法然上人全集、八九〇頁、